

俳句集

木葉木菟

第二号

史朗

春めくや 独り野山を 逍遙し

春暁や 窓のむこうは 日か月か

畝立ての 手を休めたる 穀雨かな

孟宗の 藪を潜りて 竹の秋

大驟雨 黄金散らすや 竹落葉

濃淡の色や活き活き 青葉山

露地裏に 香り届ける 洪団扇

白南風や 人無き浜を たもとおり

野分中 宿の出温に 籠りけり

拭ひても溢るるものや 秋暑し

篁の奥へ奥へと 秋の声

木漏れ日に 生るる影絵や 竜田姫

大仏の 歌碑詠む子等や 秋の空

鐘の音に 釣瓶落としの 小江戸かな

寒禽の 忽と舞い降り 名を知らず

磴道の 路を塞ぐや 朴落葉

小流れの 色重ねをり 散紅葉

寒燈の 一つまた点き 散居村

白山の 路閉ざされて 山眠る

淑氣満つ 午前零時の鐘の音

大 榎

初雪や 遅刻するぞの 声はるか

落ち葉ちらし スケボーギヤルは ゴーゴート

杖ついで歌う老婦に 冬日差し

鳳凰堂いま飛発てよ 紅葉つれ

探梅

菜の花に 風が微睡む 伊豆の里

春爛熳 蝶々と稚児が 鬼ごっこ

澄み渡る 赤城榛名に 梅匂ふ

山笑う 挨拶うれし 越生の子

明逝く 俳句つくと 云う春に

明 友人の名前

友が泣き 別れた理由を 春に識る

わけ

し

暖冬がはや梅咲かせ 風誘う

枝垂れ雨 寒さ遠のく 気配かな

老い感じ 海外行くぞ 今年こそ

蜘蛛の巣は 風にゆうゆう 伸びやかに

雲の峰 囲碁決戦の 心意気

青葉城 緑鮮やか 大トンボ

嗚呼人生 蟪蛄の斧 行暮る

老木が 殿と構えて 塀曲がる

葉を落とし 力をためる 平林寺

小春日に 一人ベンチで 先想う

俳句

談林俳諧の西山宗因は「古風・当風・中昔、上手は上手、下手は下手、いずれを是と弁(わきま)えず、すいたこととしてあそぶにしかじ。夢幻(まぼろし)の戯言(けげん)なり」と述べている。→上手は上手なりに、下手は下手なりに俳句を楽しめばよい。

木葉木菟(このはずく)

フクロウの一種。体長約20センチメートルで、日本のフクロウ類では最小。全体淡黄褐色、頭上には耳羽がある。低地および山地の森林にすみ、夜間「ぶっぼうそう」と鳴くので「声の仏法僧」と呼ぶ(ブッポウソウは別種)。九州以北では夏鳥で、冬、南に渡る。

史朗

成岡史朗。1948年8月東京都大田区生まれ。俳句・英会話・囲碁・花散歩・音楽と多種多様な趣味を持ち、妙齢の婦人に人気がある。数多くの会長を引受ける超多忙な元気者。

大櫻

星野実。1948年6月東京都足立区生まれ。「花博士」と呼ばれるほど植物に造詣が深く、温厚な人。習字に励んでおり、毛筆の年賀状が様になってきた。

探梅

箕田幸夫。1948年5月秋田県湯沢市生まれ。囲碁・古文書解読・競馬を趣味とし、温泉旅行に生きがいを感じているが、なかなか達成されない。

発行所 木葉木菟 編集部
発行者 箕田幸夫
発行日 2017年2月